



福岡の市（一遍上人絵伝より）/現岡山県瀬戸内市（中西立太 画）

新時代の夜明け

長く続いた王や貴族の時代から、武士が時代の主人公となった鎌倉時代は、その後の日本の姿を形作る上でとても大きな影響を与えました。この本は「鎌倉時代」のことを勉強するために書かれた本ですが、政治的な事柄も含め、鎌倉時代に生きた人々の生活の様子や思いが描かれています。

そうした視線でさまざまな出来事を見ると、これまでとは違う鎌倉時代が目の前に広がってくると思います。教科書に出てくる人物はもちろん、名もない武士や庶民がこの本の主人公です。



平家の栄華を象徴する厳島神社（広島県廿日市市宮島町）

1. 平安時代末期ってどんな時代？

一口に「平安時代」といっても約400年間も続いた時代ですから、平安初期と末期の時代とでは政治も経済も人々の暮らしも大きく変わりました。

平安時代は貴族の時代といわれていますが、1159年に平清盛が平治の乱で勝利してから「武士」である平氏が政治の表舞台に出てきました。清盛は自らが「太政大臣」という高い位につき一族の者にも高い地位を与え、貴族と同じ暮らしや仕事を与えました。

ところが、平氏が大きな力を持った頃というのとはちやうど「院政」の時期にあたります。天皇を退位した後は、上皇や法皇となつて、次の天皇の父親という強い権限を持つて政治を行っていました。そのため、平氏と院はなにかとぶつかり合っていました。

『用語の解説』

※ 太政大臣だいていじん＝大臣の最高位。後に「だじょうだいじん」とよばれた。

※ 院政いんせい＝退位した天皇が「上皇じやうわ」や「法皇ほふわ」

となって院庁で行った政治の形。(次の項に詳しく書いてあります)

摂関政治・院政ってなに？

794年に桓武天皇が平安京に都を移してから、わずか50年後には貴族が政治の実権にぎりました。代表的なのが藤原氏です。藤原氏は自分の娘を天皇の后にして、誕生した男子をやがて天皇にし、自らは祖父の立場を利用し、「摂政」や「関白」となって政治を行いました。

当時の結婚は「婿入婚」ですから、男の人が女の人の家に入ったため、生まれた子供は母親の家で育てられることになります(図1)。

小さい頃から祖父のいる家で育った子供は、大きくなっても祖父の言うことには素直に従いました。その子供がやがて天皇になるわけですから、およそ100年間は母方の祖父が政治の実権を握りました。これを摂関政治とよびます(図2)。

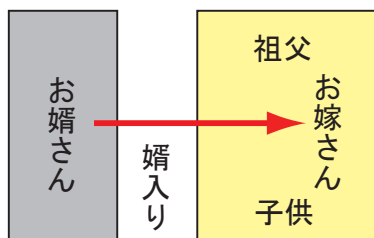
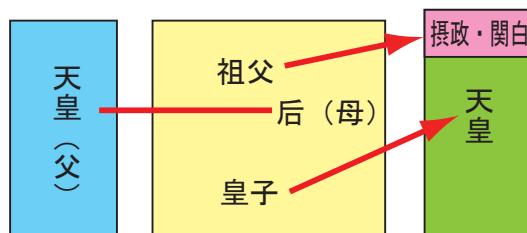


図1 婿入婚のイメージ



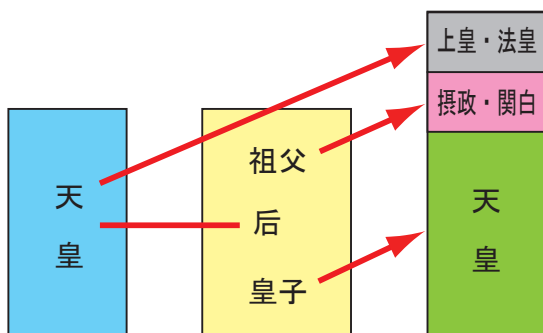
天皇と後の間に生まれた皇子がやがて天皇になる。祖父は幼いときは摂政、成人してからは関白として天皇を補佐して政治を行った。

図2 摂関政治のイメージ

ところで貴族は「楽器」や「和歌」「蹴鞠」などで遊んでばかりいたと思われがちですが、それは大きな誤解です。将来性のある結婚相手を見つけるためには、芸術・スポーツ・一般教養に優れていなければなりません。男性にとって「婿入婚」の条件とは将来性があり、父親の位が高いとか、財産を持っているということですが、また女性にとっては、頭脳明晰で、行動力に優れ、出世する見込みのある男性ということになります。ですから、男も女も一生懸命に勉強し訓練にはげみしました。

なかでも重要だったのが和歌をつくることでした。自分の思いを相手に伝えるために、四季折々の自然のうつり変わりを、人の感情、それに歴史的な出来事などを折り込み、言葉を選び抜いて31文字にまとめました。頭の回転の速さと感性が試されるわけです。

江戸時代に興り今日も盛んな俳句や川柳も和歌から生まれたものです。貴族の花嫁・花婿の修行は、現代日本人の言葉のリズムや物事の感じ方にも大きな影響を与え続けている



退位した天皇が自ら上皇・法皇と
なって政治の実験を握った。

図3 院政のイメージ

のです。

藤原氏中心の摂関政治は100年間も続きました。そうした時期（1068年）に後三条天皇が即位しました。天皇の母は三条天皇の娘ですから、久々に藤原氏と関係の薄い天皇が誕生したことになります。天皇は貴族や寺社が持っていた多くの領地（荘園）を調べさせ、法律を無視して手に入れたものや、書類が不備なものを洗い出し、その荘園を取り上げて国の領地に戻させました。この荘園整理は後の天皇にも受け継がれていきました。このことによって一番打撃を受けたのが藤原氏でその力は次第に衰えていきました。次に即位した白河天皇は退位した後に上皇となり、藤原氏を中心とする摂政・関白に對抗しました。上皇は天皇の父親という地位と天皇が持たない行動の自由を持っています。そこで、上皇は院庁という組織を作り朝廷を動かす実権をにぎりました。この政治の形を「院政」とよびます（図3）。また、上皇が出家して僧侶になると法皇とよび名が変わりますが、朝廷での実権を握っていることに変わ

りはありません。平清盛や源頼朝はこうした時代に生きていたのです。

『用語の解説』

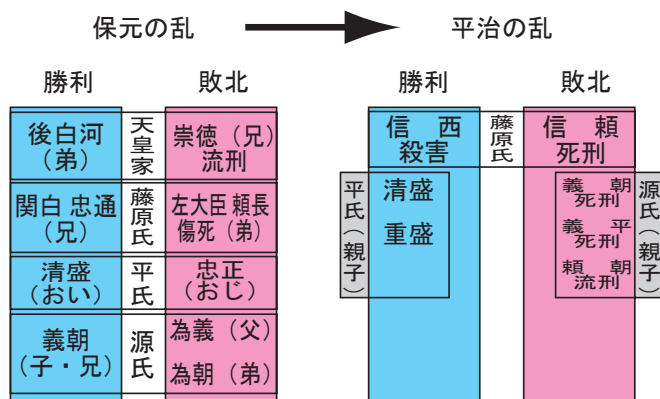
※ 頭脳明晰＝頭がよいこと。

※ 感性＝物事を感じる心

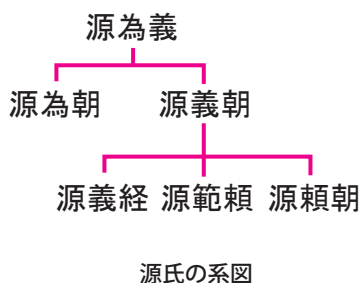
保元の乱・平治の乱で何が変わったの？（1156年・1159年）

【保元の乱（1156年）】は、上皇と天皇、藤原氏、それぞれの兄弟対立が原因ですが、その決着は武力を持っている源氏と平氏がつけてました。平氏は叔父と甥、源氏は親子で別れて戦ったため、戦後になって頼朝の父「義朝」は自分の父「為義」を処刑しなければなりません。

この時代に武士が親子兄弟で分かれて戦うのはさほど珍しいことではありません。どちらが敗れても勝利した側が肉親の命を助けてもらうようにしていたからです。ところが保元の乱では厳しい措置がくだされ、義朝は泣



保元の乱・平治の乱、関係図



く泣く父親を斬らなければなりませんでした。

一方、平清盛は邪魔者だった叔父「平忠正」を処刑し葬り去ることができました。さらに恩賞として与えられた地位は義朝より清盛の方が高かったのです。このことが原因で、源義朝は平清盛のことを恨むようになりました。

【平治の乱（1159年）は、後白河上皇に仕えていた藤原氏内部の対立が原因です。清盛に反発するグループにいた義朝は、清盛

の留守を狙って後白河上皇の御所を襲いました。しかし、体勢を立て直した清盛の軍と京都市中で戦った結果、清盛の軍に敗れてしまいました。東国に逃げた義朝は尾張国内海庄で家来だった長田忠致に風呂場で殺されてしまいます。また、離ればなれになった頼朝も捉えられました。14歳だった頼朝は命だけは救われ、伊豆国韮山に遠流されました。以後、頼朝は平家打倒の軍を立ち上げるまでの30年間を伊豆で過ごすことになったのです。

保元の乱・平治の乱の戦いによって政治的な対立を、軍力で解決する時代がきたといわれています。「愚管抄」にも「鳥羽上皇が亡くなった後、日本国に乱逆という言葉が生まれて、以後は武者の世になってしまった」と書いてありますが、戦いを実際に見た筆者の実感が伝わってきます。

平治の乱の戦の規模ですが義朝軍が2000騎、清盛軍が3000騎と記録にあり、戦死者の数も少なく、思ったより小さな戦いでした。このため、都の貴族たちは「武士の力」を過小評価したのです。

『用語の解説』

※騎Ⅱ数え方の一つ。ここでは馬に乗ることができた身分の武士。

※過小評価Ⅱ実際よりも低く評価すること。

※遠流Ⅱ都から遠くに身柄を移すこと。当時、

伊豆は最も遠い遠流の地だった。(簡単に負けた「京都(上皇)軍」に詳しく書いてあります。

※愚管抄Ⅱ天台宗の僧侶「慈円」によって書かれた歴史書。日本の始まりのことから

書かれている。特に平安時代後期から承久の乱(1221年)までは慈円が実際に生きていた時代で、その間の記事は歴史的な価値が高い。

平氏でなければ人ではない

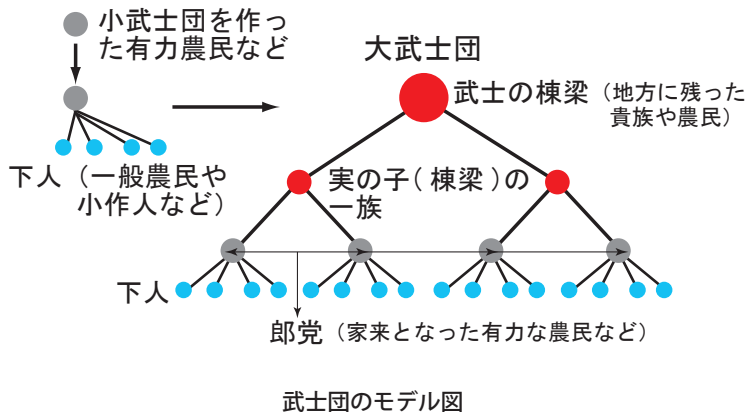
(平氏全盛期)

平安京を作った桓武天皇は、たくさんの子供に平の姓を与えて貴族と同じ身分とし、朝廷や地方の役人にしました。これが平氏の始まりです。子供たちに平の名前を与えた天皇は他に3人いますが、最も平氏が栄えたのが桓武天皇の子孫たちです。この一族を桓武平氏といいます。源氏も同じように天皇の子孫です。源の姓を子供に与えた天皇は多く21人もいました。

平氏や源氏は日本中にちらばり、それぞれの国の高い地位の役人となりました。やがて、彼らは自分の治めていた国の豪族たちをまとめて、棟梁とよばれる存在になりました。このように成長した武士のグループを武士団といいます。

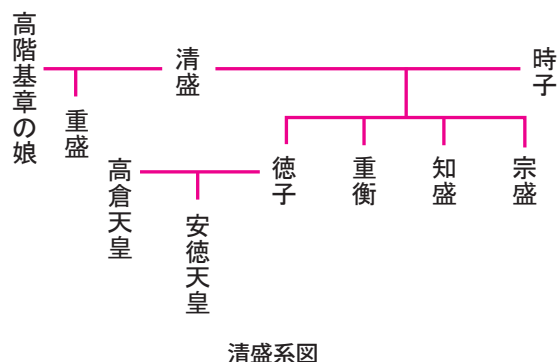
豪族としては自分たちの土地を守るために、親子や親戚同士でグループを作りそのトップに天皇の子孫という、自分たちにはない家柄の人物を持ってきたともいえます。こうした武士団は関東地方に多く、鎌倉幕府を作った源頼朝の家来も、その多くは桓武平氏の一族たちでした。

都で実権を握った平清盛も桓武平氏ですが、伊勢に勢力を持っていたため特に「伊勢



平氏」とよばれるようになりました。清盛一族が保元の乱・平治の乱をへて実力ナンバーワンになると、伊勢平氏は全国の半分以上の国を支配し、清盛の娘は天皇と結婚し、一族は急速に繁栄していきましました。

清盛の妻「時子」の兄弟だった平時忠は宴



会の席で「一門に非ざらん者はみな人非人たるべし」と言ったのです。これだけでは分からないので、後の世の人が「平家にあらざるば人にあらざる」とわかりやすいか換えしました。「平氏でなければ人ではない」という意味です。この場合の平氏は清盛一族を指します。

一方、同じ平氏とはいっても、関東の平氏たちは立場も弱くいつも戦におびえ、京都によばれては清盛一族（伊勢平氏）に家来として扱われるなど、その差はとても大きなものでした。しかも清盛たちは自分たちにそむく者は徹底的に弾圧したので、人々の不満はとても大きくなっていきました。こうした社会背景があったからこそ、関東の武士（主に平氏）たちが次々と頼朝の家来となつて幕府を支えていったのです。

やがて、清盛一族は木曾義仲や頼朝によって滅ぼされました。一族のほとんどは戦死するか捕まつて殺されましたが、時忠一族だけは見逃されて能登の珠洲というところに住みつきましました。



時忠と一族のお墓（問い合わせ先：珠洲市教育委員会文化財課）



現在の上時国家（最寄り駅：のと鉄道七尾線「穴水」駅から能登中央バス「上時国」バス停）

時忠の子孫は時国と名乗り、鎌倉時代以後も能登の名門として今日に至っています。

最後に「平家にあらずんば」に対する平家物語の言葉を一つ紹介しましょう。

「おごる平家は久しからず」おごり高ぶった平家はすぐに滅びてしまった、という意味で、現在でもお金や権力の力で威張ったりした人が急速に落ち目になった時などの言葉として使われています。

『用語の解説』

※ 棟梁＝武士団を束ねるトップの人。地域ごとにいたが、やがて頼朝に一本化された。

主に源氏や平氏、藤原氏の子孫になった。

※ 豪族＝力のある農民や漁民の長。多くが武装して武士となっていた。

※ 伊勢＝現在の三重県伊勢地方。

※ 一門＝同族。ここでは伊勢平氏のこと。

※ 弾圧＝権力者が反対する者を力でおさえること。場合によっては殺すこともある。

優れモノの平清盛

平清盛は頭が良く、行動力もあり、若い頃から勇敢だったといわれています。また、他人に対しては思いやりがあり、家来にも優しく接したため、周りの武士から大変に信頼されていました。一方、頼朝の父、義朝は、若い頃に他人の領地を荒らすなどしたため、恨みをかうことが多かったのです。平治の乱（1159年）では、途中で家来が逃げてしまふなど、このことからしても義朝の人望の薄さを感じとれます。

平治の乱の後、義朝の子供は全員が処刑されても不思議ではありませんでした。しかし、清盛の乳母だった池禪尼の命乞いにより頼朝の命は助けられ伊豆に流されました。これは後に清盛が一番後悔したことでしたが、清盛の人間性がよく現れている出来事だといえます。

清盛の政治は貴族のやり方を真似たものです。武士というより貴族として政治をしたと

いったほうがよいでしょう。娘「徳子」を天皇の后にして、生まれた子供をわずか2歳で天皇に即位させ、「祖父」の地位を利用して思うがままの政治を行うところなど、藤原氏の「摂関政治」とそっくりです。

しかし、支配地に地頭とよばれる役人を置くなど、武士としての一面も持っていました。また宋との貿易に力を入れ、中国の珍しい文物や新しい技術を日本に取り入れられました。なかでも宋銭を大量に輸入したことは大きな功績の一つといえます。鎌倉時代は交通の発達とともに経済が発展した時代です。商品の売り買いにお金はなくてはならないものです。鎌倉時代に大量のお金が使われるようになったのも、清盛の時代から宋銭を輸入していたからにはかありません。もし清盛がこれほどお金を輸入していなかったら、お金の便利さは広まらずに、鎌倉時代の経済発達は遅れただろうと思います。清盛は「経済の発達に、お金はなくてはならないものだ」ということが分かっていたのです。

頼朝もまた優れた人でした。彼は東国の武

士が求めるものを知っていてそれを実現しました。そこから武士らしい政治が始まったといわれています。一方、清盛の生まれた時代はまだ貴族の時代で、彼は武士でありながら貴族の政治を行いました。それは中途半端（ちゅうとはんぱ）というのではなく、そうした移り変わりの時代だったからなのだと思います。

清盛は「富士川の合戦」の後に病気で亡くなりましたが、その後の平氏は木曾義仲（きそよしのむねなか）の軍隊に破れて京都（きょうと）を去り、最期は義経（よし経）の率いる東国の兵に壇ノ浦（だんのうら）で滅ぼされてしまいました。

「おごる平家は久しからず」と平家物語にも語り継がれているように、権力を握ってからの清盛は天皇をないがしろにし、上皇を脅（おど）かすなど強引な面もありました。また一族ばかりが繁栄（はんえい）して他の貴族や武士たちから反感をかうこともありました。しかし、人間としての清盛は先を見据（み）える力を持ち、穏やか（おだ）だか物事を最後までやり抜く力強さに溢（あふ）れた人だったといえるのです。

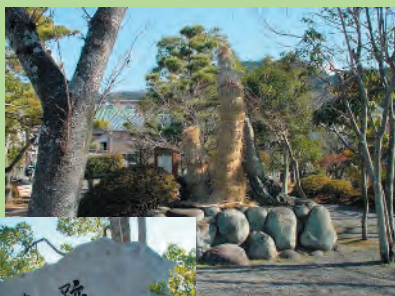
『用語の解説』

- ※ 池禪尼（いけぜんに）＝忠盛と結婚し、平家盛、頼盛という清盛と腹違いの男児を生んだ。頼朝が早世したわが子家盛に生き写しだったことから命乞いをしたといわれる。
- ※ 人望（じんぼう）＝皆からしたわれ信頼されること。
- ※ 宋（そう）＝当時の中国。
- ※ 宋銭（そうせん）＝宋の貨幣（お金）。
- ※ 乳母（めのと）＝育ての親。位の高い人は子供の頃は別（べつ）の家で育てられた。
- ※ 摂関政治（せつかんせいせい）＝平安時代の有力貴族は娘を天皇に嫁がせて皇子を生ませ、その子を天皇に即位させ自らは「摂政（せつせい）」や「関白（かんぱく）」となって実権を握りました。藤原氏一族が有名。

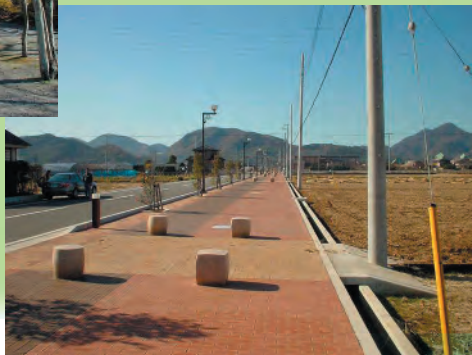
自由だった伊豆の頼朝

（1160年～1180年頃）

伊豆に流されてからの頼朝の生活については様々な説がありますが、流人（るにん）（罪人）という立場にしては、自由な生活を送っていたようです。



現在の蛭ヶ小島に建つ「頼朝遠流の地」石碑(左) 蛭ヶ小島の周辺。近くを川が流れていて、当時周りは湿地だったようです。（最寄り駅：伊豆箱根鉄道「菰山」）



頼朝の乳母「比企尼」が食べ物を送り、平治の乱で領地を失った佐々木定綱4兄弟が従者として任えていました。さらに頼朝の生母の家系である熱田神宮の大宮司家からもお金が送られていました。

頼朝が石橋山の合戦で負けて山中を逃げているとき、数珠を落としてしまったので大いにあわてたという話があります。その数珠を多くの武士が見て知っていたからです。それだけ頼朝は伊豆や相模の武士に知られていたということになります。頼朝はその昔、関東の武士団を束ねて棟梁となつた源義家の家柄であり、父、義朝もかつて鎌倉にいた武士の棟梁です。しかも源氏という家柄は天皇の子孫です。

武装した農民が始まりという関東の武士団にとつて、頼朝は武士の棟梁になる資格が十分にあつた人といえます。ですから、頼朝の周囲には千葉氏や三浦氏の若者をはじめ、関東の有力武士の息子たちが出入りしていたのです。

伊豆の豪族伊東祐親は頼朝のために小さな館を提供して7年間も住まわせていたといわれています。こうしたことから、流人という身分ではあつても貴人の頼朝は、伊豆や関東の武士から丁重に扱われていたことが分かります。ところが、祐親が京都へ出向いている間に娘「八重姫」と頼朝の間に子供ができてしまいました。怒つた祐親はその子を殺してしまつたとも、甲斐の豪族に預けたともいわれています。京都で反平氏の事件が相次いでいたという時期が悪かつたのです。

やがて、頼朝は自分の見張り役だつた国役人「北条時政」の娘「政子」と結婚をしました。当初、時政は結婚に反対でしたが、政子の強い願いと「将来頼朝は、関東の武士を束ねる人間になるかもしれない」という計算が働いて北条の館に迎え入れたと考えられています。

二人の間には大姫という娘が産まれました。1177年、頼朝が32才、政子が22才くらいこの時の話です。このように平和に暮らしたかった頼朝です

が、周囲では大きな変化がおきていました。

『用語の解説』

※熱田神宮＝名古屋にある格式の高い神社。

大宮司家は神宮で最高位の家柄。

※甲斐＝現在の山梨県の国名。

こわされた平和な生活

文覚上人という人はもと武士でしたが、誤つて好きな女性を殺してしまい、それで僧になつたという怪しげな人物です。那智の滝にうたれるなど修行に励んだため、京の都で「荒聖」として有名になりました。ところが、あるお寺の再興運動で後白河の御所に入り、むりやり寄付をたのんだ挙げ句、悪口雑言をはいたという罪で、頼朝と同じ伊豆の国に流罪になつてしまいました。

その文覚が結婚したばかりの頼朝に会い、平家を討てとそそのかしたのです。ですが当時の頼朝には全くその気がなかった（ふりを



蛭が小島に建つ頼朝と政子の銅像。
(最寄り駅：伊豆箱根鉄道「韭山」)

していたか・・・)ので、曖昧な態度をとっていました。

ある日、文覚はふところから頼朝の父「義朝」の頭蓋骨を取り出し、「これこそ、御父君の首」と頼朝に決断を迫りました。さらに文覚は京都へ往復して後白河法皇が書いた

平家打倒の「院宣」をもってきたと「平家物語」には書いてありますが、流人の文覚が京都に行くことは不可能で、仮に行けたにしても法皇の院宣など貰えるわけがありません。結局、この話は作り噺の書き直しといわれています。

ふところから出した頭蓋骨も義朝のものではなかったでしょう。文覚は個性が強く話のうまい人ですから、言葉たくみに頼朝を動かそうとしました。その話が大きさになって頭蓋骨とか院宣の話になったのだと思われるます。いずれにしても、平和に暮らしている頼朝には大変迷惑な話でした。平家物語には「あの坊主がよけいなことを思いついたりするものだから、困ったものだ・・・」と、しきりに心配していた頼朝の様子が書かれています。こちらのほうがよほど真実がある感じがします。

『用語の解説』

※ 荒聖Ⅱきびしい修行をつんだ僧のこと。

※ 再興運動Ⅱすたれたものを、再度たてなおすこと。

※ 悪口雑言Ⅱ口汚くのしること。

※ 院宣Ⅱ上皇や法皇の命令。

イチカバチかの頼朝挙兵

(1180年)

このころ、京都では後白河法皇の皇子「以仁王」と、平家政権内でただ一人の源氏有力者であった源頼政が手を組んで、平氏打倒の戦いをはじめました。1180年4月のことです。

戦いは失敗して以仁王も頼政も死んでしまいました。しかし、以仁王が生前に書いておいた平氏打倒の令旨は、すでに諸国の武士に向けて出されていました。木曾義仲や甲斐の武田源氏、そして伊豆の頼朝にもその令旨は届きました。しかし、この時点になっても頼朝には戦う意志がなかったといわれています。

6月になると頼朝の元に、京都にいる乳母の甥「三好康信」から「あなたの命が狙われているから奥州へ逃げなさい」という手紙が届きました。これによって覚悟を決めた頼朝

は、ついに関東の武士に挙兵^{きよへい}への協力を頼みました。しかし、この話はどこからかもれてしまい、相模の有力豪族大庭景親^{おほばかげちか}の耳に入ってしまった。景親は関東に逃げてきた頼政の孫たちを捕まえる命令を受けていたので、平家方だった大庭景親は謀反人^{むはんじん}頼朝を討つための行動をすぐさま開始します。

追いつめられた頼朝は、伊豆の武士たちに嫌われていた目代^{もくだい}山木兼隆^{やまきかねたか}を倒す決意を固めました。山木襲撃^{しゅうげき}に従った武士は時政を中心にした北条氏や頼朝に任えていた佐々木兄弟、それに安達盛長^{あだちもりなが}たちでした。しかしなんと、いっつも旗揚げ^{はたあげ}した最大の理由は「関東の有力豪族が味方になる」という後ろ盾^{うしろかた}があったからです。

関東地方には開拓によって領地を広げていた多くの豪族がいます。彼らはそれぞれが一族を守るために武装していました。なかでも父義朝の家来だった三浦氏・中村氏・千葉氏などの豪族が頼朝にとって頼みの綱でした。しかし、大部分の豪族は大軍の大庭景親^{おほばかげちか}にいたり、様子を見たりしていましたので、兵

を挙げた当時の味方は少なかったのが実状です。頼朝は本当にイチかバチかの勝負に出たといってもよいのです。

『用語の解説』

※ 令旨^{りようし}＝皇子の出す命令書のこと。この場合、

平氏を打倒せよと言う以仁王^{いじん}の命令。

※ 奥州^{おうしゅう}＝現在の東北地方。

※ 謀反人^{むはんじん}＝権力者に逆らう人。権力者を裏切る人のこと。

※ 目代^{もくだい}＝国主の代理人。実際にその国に出向き仕事をした。

※ 旗揚げ^{はたあげ}＝戦をすることを決意すること。

間一髪だった新時代

「吾妻鏡^{あづまかがみ}」には、『治承4年8月23日（1180年）頼朝以下300名は神奈川県真鶴岬^{まなづかみさき}付近にある「石橋山^{いしばしやま}」に野営するところとなったが、夜になって大雨となる。谷一つを超えた場所に大庭景親^{おほばかげちか}の軍勢3000名が前方に立ちふさがり、後ろからは伊東祐親^{いとうすけちか}



急斜面に蜜柑畑が広がる石橋山古戦場。800年前にここで死闘が繰り広げられた。（最寄り駅：JR東海道線「早川」または「根府川」）

の軍勢300名が迫ってきた』とあります。頼みとしていた三浦の軍勢は増水した酒匂川^{さかわがわ}の岸でなかなか川を渡れませんでした。三浦の軍勢が迫っていることを知った大庭景親は、夜になって頼朝軍を襲^{おそ}うことを命令し、ここに石橋山の合戦が始まりました。戦いは深夜におよび頼朝軍では真田与一義忠^{さなだのよいちよしただ}ならびに武藤三郎^{むとうさぶろう}、および家来の豊三^{へんざう}・家安^{けいやす}たちが戦死しました。



温泉で有名な伊豆の伊東にある「伊東祐親の像」。頼朝を追撃するときの姿もこのようだったことでしょう。(最寄り駅：JR伊東線「伊東」)



石橋山古戦場にある真田与一の霊を祀る「真田霊社」。海が見える高台の上にあります。(最寄り駅：JR東海道線「早川」または「根府川」)

石橋山古戦場は現在では急斜面に「みかん畑」が広がっています。筆者は現地を訪れたことがあります。真つ暗やみの土砂降りの中、急斜面を上ったり降りたりしながら何時間も殺しあっていたのかと思うと、足がすくむような恐ろしさを感じました。

真田与一忠義は一旦敵をねじ伏せたのですが、血で固まって抜けなくなった「鎧通」を抜こうとしている間に、後ろから来た敵によって殺されてしまいました。

夜明け頃、総くずれになった頼朝軍はちりぢりになって敗走しました。その時、頼朝に従った武士は土肥実平以下わずか6名だけです。

治承4年8月24日のでき事

大庭景親の軍勢は早朝から小さな戦闘を続けながら頼朝を追いましたが、あたりの地形に詳しい土肥実平の導きによって、頼朝一行は土肥の館を目指して逃げていきました。その間、一行は梶山の内堀口という所で敵と戦

相模の武士団

土肥実平・土肥遠平
土屋宗達・土屋義清
中村氏一族

岡崎義実・真田与一
三浦義澄・和田義盛
平佐古為重

三浦氏一族
大庭景義 豊田景俊
など

伊豆の武士団

北条時政・北条義時
北条宗政・平時定
北条氏一族

宇佐美茂・宇佐美政光
宇佐美氏一族

加藤景員など 工藤党

頼朝軍

相模の武士団

大庭景親・俣野景久
梶原景時(頼朝を助ける)
大庭氏一族

澁谷重国・糟屋盛久
海老名季員・曾我助信
毛利景行・長尾定景
横山党・秩父など
後に頼朝側に加わろうとした武士

反頼朝軍

伊豆の武士団

伊東祐親



頼朝一行が隠れたと言われる梶山「しとどの岩屋」付近。深い山あいの洞窟がこの向こうにあります



土肥氏の館址から望む湯河原の町。あの山の向こうに石橋山があります。（最寄り駅：JR東海道線「湯河原」）

いました。吾妻鏡には頼朝も弓をもって戦ったと記録されています。頼朝はこの戦いで戦死してもおかしくない状況でしたが何とか逃げ切ることができました。夜になって箱根神社の遣いが間一髪のところまで救出にきました。

頼朝はなぜ助かったのでしょうか？

道に詳しい土肥実平がいたこと、梶原景時のように大庭の軍勢にありながら頼朝に心をよせる武士がいたことなど、いくつもの幸運が重なったこともありましたが何よりも大きかったのは、「今のままでは自分たちの生活が良くなることはない」という関東武士団が持つ共通の願いがあったからに他ありません。

梶原景時は頼朝一行を見つけたにもかかわらず「ここには誰もいない」と偽って、追手を別の場所へ導きました。また、飯田家義は夜中にこっそり現れ、頼朝に「家来にしてくれ」と頼みました。また、頼朝の祖父「源為義」以来関係の深かった箱根神社の別当が救援の手を差し伸べたこと。これら全

てが頼朝に味方しました。

歴史の歯車がちよつとでも狂って頼朝が死んでいたら、日本の歴史は大きく変わっていたことでしょう。

『用語の解説』

- ※ 吾妻鏡Ⅱ 頼朝の旗揚げから北条氏の政治が続いた67年間の記録。
- ※ 鎧通Ⅱ 鎧の「すきま」から相手の急所を刺し切る小型の刀。
- ※ 土肥実平Ⅱ 義朝時代から源氏と関係の深かった中村氏一族で、石橋山を含む湯河原一帯を治めていた豪族。
- ※ 別当Ⅱ 事務的なことをする責任者。
- ※ 間一髪Ⅱ 髪の毛一筋ほどの、ギリギリのところまで事態が迫っていること。



荘園「田染庄」(現大分県豊後高田市) (中西立太 画)

2. 荘園が支えた貴族と武士の生活 (8世紀～13世紀)

歴史の勉強をしていて、中世の部分になると必ず出てくる言葉が「荘園」です。
教科書では、

- ① 人口の増加と農民の逃亡によって、口分田が不足し、税収が落ちたことによつて開墾を奨励したこと。
 - ② 743年に「墾田永年私財法」が出され、有力寺社や貴族が私有地を広げ、それが荘園とよばれるようになったこと。
 - ③ やがて、不輸租・不入の権を持つ有力者に地方豪族が開墾した領地を寄進したること。
 - ④ その結果、藤原氏一族が広大な荘園を持つに至ったこと。
 - ⑤ と、同時に地方豪族が力を持ち武装化して武士になったこと。
 - ⑥ 武士が互いに連携して武士団を形成していったこと。
 - ⑦ 院政が始まると、上皇の元に荘園が集まったこと。
- などが簡潔に書かれていますが、その実態となるとなかなか分からない部分があります。



そこで、この項では荘園の発生から発達していく過程を明らかにして、武士や庶民の生活と切っても切り離せない荘園についての理解を深めたいと思います。

荘園が現れる前（6世紀）

荘園とは大きな寺院や神社、貴族がその財力で新しく開墾した土地のことを指します。それ以前は645年の大化の改新以後に決められた「公地公民の制度」により、土地と農

民はすべて朝廷のものと定められていました。652年には班田収授法が行われ、男女・子供・奴婢にそれぞれ決まった広さの土地を貸し与え、農民から租・庸・調の税をとりました。図はその頃の農村の様子を表しています。水田は主に川の流域や水路沿いに作られています。

『用語の解説』

※ 開墾＝原野を切り開き、耕し畑や水田に
かえること。

※ 班田収授法＝男子には2反（現在の23アール）、女子にはその3分の2、奴は良民男子の婢には良民女子のそれぞれ3分の1の水田が貸し与えられた。この田のことを口分田といい、その人が亡くなると土地を返すということが決められていた。

※ 奴婢＝奴隷のこと。当時は人間の売買が認められており奴は男性の、婢は女性の奴隷を指した。こうした人々は賤民とよばれ、一般の人々である良民とは区別されています。奴婢の数は当時の人口の約10%とい

われています。

※ 租・庸・調＝租はお米、庸は労役のかわりに布などを、調は織り物や地方の特産物を、いずれも都まで運んでおさめる税でした。なお、租は収穫高の約3%。

農民にとって租・庸・調の取り立てはとても厳しいものでした。しかも税はそれだけではなく男性が兵にとられたり、雑徭や出挙もあつて、逃げ出す農民があとを絶ちませんでした。このため耕されずに荒れはてた口分田があちこちに見られたと記録に残されています。農村から逃亡した農民を浮浪人とよびますが、多いときには5人に1人が浮浪人という状態でした。後に、こうした浮浪人が有力者の荘園を開墾する力になっていったのです。

朝廷は723年に「三世一身法」を出しましたが、農民の逃亡はおさまらず、ついに743年に「墾田永年私財法」を出しました。これは新しく開墾した土地の私有を認めるという法律でした。この決まりでは大寺社や貴

族には広い面積（当時の500町歩）を、一般農民には狭い面積（当時の10町歩）の私有を認めました。また、豪族や役人にはその身分に応じて面積を割り当てました。500町歩～10町歩というのは上限と下限の面積です。

『用語の解説』

※雑徭＝1年に60日以内、地方の労役に出ること。農民にとつてはとても大きな負担であった。

※出挙＝役所が種もみを貸し出し、収穫後に利子と合わせて稲をとりたてること。

※三世一身法＝新しく開墾した土地は親子・孫の3代までは土地の私有を認める法律。ただし4代めには返さなくてはならない。

※墾田永年私財法＝新しく開墾した土地は完全に私有化してよいという法律。初めの頃は身分により限度が決められていたが、奈良時代の終わりには限度はなくなつた。

※豪族＝ここでの豪族は地方の有力者のこと。大和政権時代から力を持つてその地方

を支配していた一族のこと。その多くは律令時代となつても郡司となつて地域での影響力を持っていた。

荘園ができた…（7世紀～9世紀）

朝廷は新しく開墾して水田を作るときに、国の管理する用水を使う場合は「全て公田とする」という決まりを作つたため、完全に私有するためには新しく水路を作る必要がありました。水路を造るためにはたくさんのお金と労働力がなければなりません。結局、そうした力を持つ寺社や貴族、あるいは豪族などが新しい土地を手に入れました。これが荘園の始まりです。しかし、私有地といつてもそこから収穫される稲には税がかかりますから、朝廷にとつても大いに助かる話でした。（ただし有力な寺社には免税の権利が与えられています）

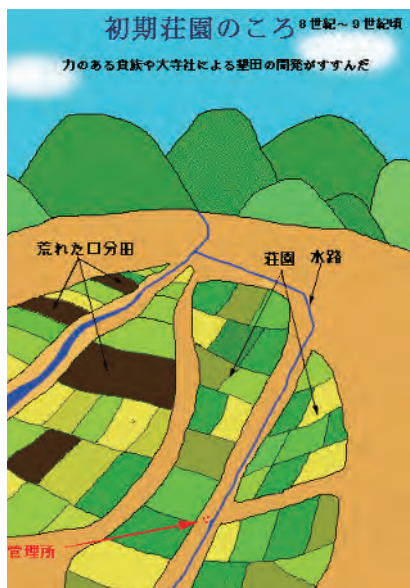
さらに749年に東大寺の大仏ができると、朝廷は東大寺に4000町歩の開墾を認め、その他の寺院にも2000町歩、1000町

歩と認めていったため、ここに大規模荘園が現れることになりました。今でも各地に東大寺領の荘園址が多く残っているのはそのためです。こうした荘園を現在では初期荘園とよびます。

『用語の解説』

※公田＝朝廷の支配下にある水田のことです。収穫されたお米から租を朝廷に納めなくてはならない水田のこと。

左の図は初期荘園のイメージです、新しく





「上荒屋遺跡」から発見された庄所跡。手前の凹地は当時の水路址（東大寺領横江庄）（最寄り駅：JR北陸本線「野々市」）

開墾された水田のことを「墾田」といいます。水路も新しく作られたものです。これらを作るための労働力は、貴族や大寺社が抱えていた奴婢、それに口分田を捨てて逃げ出した浮浪人、あるいは近くに住む農民の力を使いました。

一般の農民には賃金が払われましたが、その多くは収穫された「お米」で支払われていたようです。一般に直営の荘園ではほぼ全額が荘園主の収益となりましたが、一般の農民の力を借りて経営している荘園では5分の1に収益が減ったといわれています。運送費も荘園主が負担しますから、遠いところでは荘園経営が成り立たなかったともいわれています。この時期の荘園分布が近畿・中国・北陸地方に集中していることでそれを証明できるともいわれています。

というわけで、この時期の荘園の持ち主は貴族や大寺社が圧倒的に多かったのです。こうした荘園では農民の取り分以外に租を朝廷に支払っていましたから、朝廷の収入はそれなりに確保されていました。この時期、武士はまだ登場しません。

9世紀になると、天皇家自身が財政をおぎなうために、勅旨により勅旨田を開墾したり親王に賜う親王賜田を盛んに行ったため、私有地はどんどん増加していきました。また、貴族たちはこれらの土地に「荘官」と呼ぶ「使

い」を派遣しました。荘官は荘園の開墾を指揮し、収穫された農産物をおさめる倉を設けました。これを「庄所」とよび、地名を付けて「○○庄」とよびました。これが荘園の始まりといわれています。初期の荘園は全てこうした荘園主が直接経営にたずさわっていました。

『用語の解説』

※ 勅旨＝天皇の命令。

※ 勅旨田＝天皇家の墾田。

※ 親王賜田＝天皇の子供の墾田。

※ 荘官＝この頃の荘官は荘園主に派遣された人。後の荘官とは大きく異なるので要注意。

※ 庄所＝荘園の管理所。

広がる荘園（9世紀～10世紀）

9世紀のなかば頃になると地方豪族も盛んに土地を開墾しはじめました。このころには班田収受法はほとんど無視され、有力な農

民の中には代々耕作していた口分田を自分の物にしたり、未開地を開墾する者も現れました。こうした土地のことを「名田」とよび、持ち主を「名主」といいます。右図では耕作者がいなくなった荒れた口分田の他に名田が出現しています。また、新たに水路が開発され盛んに荒れ地が水田にかえられていきました。



本格荘園がはじまった

(10世紀頃)

初期の荘園は寺社や貴族が、お金と労力を自ら調達して開いたので自墾地系荘園とよぶのに対して10世紀以後の荘園を寄進地系荘園とよびます。寄進とは「さしあげる」ことから「誰かにあげた荘園」ということになります。「誰か」、というのはこの場合強い力を持つ「有力な寺社や貴族」ということになります。1016年に摂政になった藤原道長は「この世をば わが世とぞおもふ望月の欠けたることもなしと思えば」と歌によみました。この時代もとても権力をふるっていた藤原氏には、たくさん荘園が集まってきたのです。

『用語の解説』

※ 自墾地系荘園＝自らの財力で新たに切り拓いた荘園を、現代の学者がこう分類しましたが、当時の人がこのようによんでいたわけではありません。

※ 寄進地系荘園＝荘園主の名目的な持ち主を、有力者にかえた自墾地系荘園のこと。

※ 摂政＝天皇が幼少の時に政治の補佐を行う役職。

※ 藤原道長＝摂政・太政大臣となり、藤原氏が最も権力を持ったときの貴族。「この世をばわが世とぞおもふ望月の欠けたることもなしと思えば」は「満月が欠けていないように、この世の中は藤原氏のものだ」という意味。

横暴な国司現る（10世紀頃）

国司とは今の県知事にあたります。藤原氏が大きき力を持っていた頃には、藤原氏の都合のよいように国司が任命されました。藤原氏一族や藤原氏にたくさん贈り物をするような貴族が選ばれたのです。国司の中には任地に行かずに代理人をおき、都に住んでいる者もいました。また、領民から定められた以上の税をとりたて、自分の収入を増やすことに熱心だった者や、そうして得た金品を藤原氏

に送り自分の地位を守る国司もいたと記録にあります。さらに、部下に命じて豪族の開墾した土地を襲ったりする国司まで現れました。

代理人に仕事を任せた国司のことを「ようんにん遷任国司」といい、実際に任地にいつてそこを治める国司を受領と呼びます。

『用語の解説』

※ 横暴Ⅱ決まりを無視して暴力で自分の思いを遂げること。

ついに現れた武装農民

(10世紀頃)

口分田は次々と名田化し班田收授法は全く行われなくなりました。また、藤原氏のような超有力貴族の力が強まるとそれまでの領主であった大寺社や一般貴族の力が衰えてきました。そうした荘園の中には農民自身が小さな開発を行って私有化する者が現れました。これは口分田に対する名田の関係と同じで

す。こうした田のことを「はりた治田」とよびます。

そして、こうした社会状況の中で農民や豪族は国司の横暴から自分の土地を守るために武装するようになりました。これが武士のはじまりです。つまり、始めの頃の武士は武装した農民だったということです。

かしこい手口

(不輸の権・不入の権)

「不輸」とは税を朝廷におさめなくてもよいという権利です。これは有力な貴族や寺社が自分たちの収入を増やすための取り決めです。正確には「不輸租」といいます。「不入」とは役人の立ち入りを拒むことのできる権利のことです。初期の頃は寺社だけが持っていた権利ですが、やがて貴族たちにも認められるようになりました。特に藤原氏は力が強かったため、広い耕作地を持つ豪族や有力農民はあらそって自分の土地を藤原氏に寄進しました。

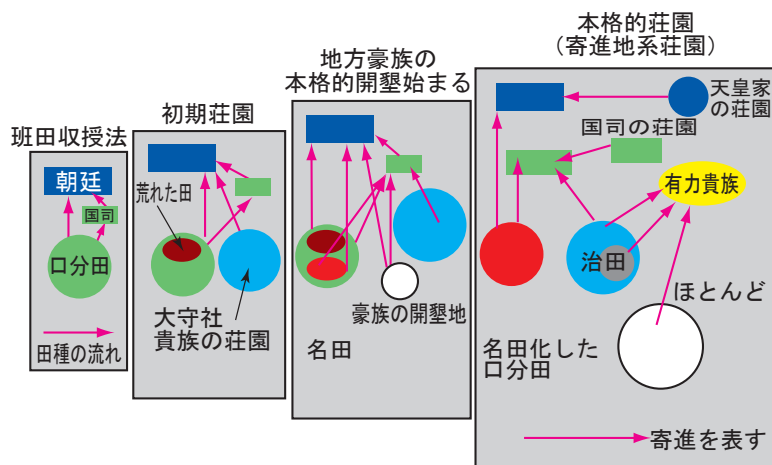
こうしておけば地方の豪族は国司の横暴や

隣地との争いに有利になります。その土地は名目上、有力者の荘園となり「不輸・不入の権」を得ることができるようになります。一方、貴族にとっては何もしくなくても多くの農産物や特産物が手に入るわけですから、両者にとって有利なことといえます。

こうして多くの荘園領主が中央の有力者に代わっていきました。このような名目上の領主のことを「ほんじょ本所」とか「りやうけ領家」とよびます。そして本来の持ち主である地方の豪族は「しやうかん荘官」「げし下司」「ぢめし地主」とよばれ実質的な荘園の支配を続けました。

「したたか」だった有力農民

寄進していた先の貴族や寺社の勢いが弱まると、寄進先を替えるなくてはなりません。領主の力が弱まればいくら「不輸・不入の権」を主張しても無視されたからです。そこで、力を失った貴族や寺社は自らを「あずかりどころ預所」と称し、寄進された荘園をさらに有力貴族に寄進しました。つまり名目上の持ち主の、その



図・本格的荘園が出現するまでのイメージ

また上の名目上の持ち主というわけです。

また、本来の持ち主である荘官の中には寄進先をくら替えするものもいました。こうしたことから荘園には複数の名目上の持ち主が現れることになります。

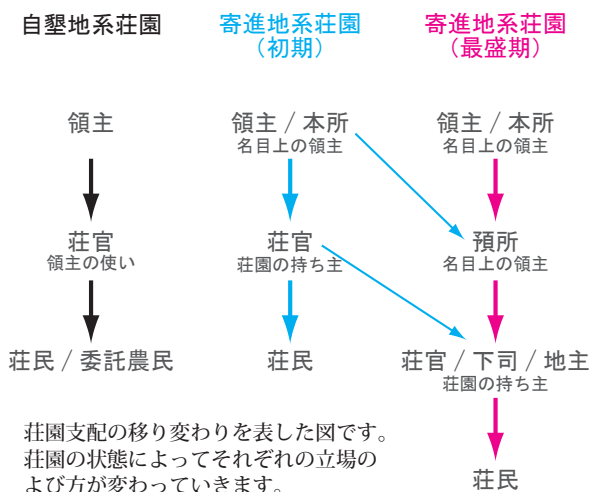
ここで、ちよつと整理してみましょう。

寄進地系荘園が出現するまでは、一部の寺社や貴族の土地を除いて、全ての田租（税となる米のこと）は直接都へ運ばれたり、国司のもとへ集められました。国司は必要経費を除いてそれらを都に運びました。ところが班田收授法が行われなくなると、私腹を肥やす国司が増え、朝廷に出すべき租税をぐまかしたり、自らの領地を増やすことに熱心な者も現れました。しかも、多くの荘園が「不輸・不入の権」を手に入れるため、本来、朝廷へ納められるべき租税は少なくなる一方でした。それでは困るので、天皇家も自らの荘園を持ちました。こうして律令制度の根幹である「班田收授法」は事実上消滅しました。これから先は荘園や名田、あるいは治田が経済の基盤となります。

ここまでをまとめてみましょう

① 自墾地系荘園の持ち主は「領主」で、荘官は使いにすぎない。

② 豪族の開墾田などは、有力貴族や大寺社に寄進して、名目上の持ち主にした。この時期の本当の持ち主は「荘官」とい



最盛期の荘園 10世紀～12世紀

多くの荘園が寄進される頃



うことになり、自墾地系荘園と寄進地系荘園の荘官とは全く性質が違ふ。

- ③ 特定の貴族（特に藤原氏）の力が強まると、名目上の領主がさらに自分より強い力を持つ貴族に寄進するという形をとったため、今までの領家は預所と称し、田租の一部を寄進した貴族に納めた。この時期でも事実上の持ち主は荘官で、場所によって下司とか地主とよばれた。
- ④ 自墾地系荘園はのちのちまで続くが、領主である貴族や寺社の力が衰えると支配力が弱まり、荘園内を新たに開墾して

私有地にしてしまう者や、使いだつたはずの荘官が力を付けて、自らの開墾田を増やすといったことが行われるようになった。

- ⑤ 律令は名ばかりとなり、平安時代中期から後期は強い者が勝ち、弱い者は滅びるか強者に従うという時代になった。

この図では、豪族の開墾した土地が寄進されています。口分田はもう見られずに「名田」になってしまいました。また自墾地系荘園の中にも「治田」化した土地が見受けられます。このように土地の所有は、大小の権力者によって、それぞれ勝手に名目を変えられたり開墾されたりするようになりました。

今も残る荘園のあと

田染庄（現大分県豊後高田市）は今でも荘園の面影を残している地域として知られています。現在も田染の地名を残すこの荘園の歴史は古く、墾田永年私財法が出されると国東半島で大きな力を持っていた



田染の庄

（中西立太画）

（最寄り駅：JR日豊線「宇佐」）



日根野の庄（図中、最大の池が住持谷池）
（最寄り駅：ＪＲ阪和線「日根野」）
（中西立太画）

「宇佐八幡宮」によって開発が始まりました。鎌倉時代になると関東から送られた御家人（地頭）が支配した時期もあったようで、今も当時の水田や村の区分けが残っている所があります。この図は荘園だった頃を推定して描かれたもので、村落の中に荘官の屋敷をはじめとして神社や農家が集まっている様子を表しています。

「日根庄」は1234年（鎌倉時代）に作られた荘園です。現在の大府泉佐野市日根野にありました。田染同様に地名は残っていますが市街化が進み景観は大きく変わっています。開発当時、日根野には荒野が広く残っていました。開拓が、日根野の水を住持谷池まで開削した水路（現湯川）で連結して一気に開発が進みました。この絵はそうした開発にともなう絵図を参考に描かれたもので、水路と池が忠実に描かれていると同時に、荘園内に複数の村があったことが示されています。日根川は今も同じ位置を流れ、水路は現在も十二谷池（旧住持谷池）に流れています。



十二谷池（鎌倉時代の住持谷池）は護岸工事が行われ、現在も農業用水として使われています

『用語の解説』

※ 日根庄ひねのやしろⅡ室町時代中期以降は「日根野庄」とよばれた。

※ 御家人ごけにんⅡ頼朝と主従関係を持った武士のこと。

地方色がいっぱい、年貢の身身

信濃国筑摩郡にあった麻績御厨まねのみくりやの記録から、当時の荘園から何を年貢に出していたかを調べてみました。

麻績御厨はもともとは皇大神宮領こうたいじんぐうりょう(伊勢神宮内宮)でしたが平安時代末期には平正弘が領家となりました。しかし保元の乱以後に院領となり再び内宮領となった荘園です。いまでも荘園の中心であった神明社が残っています。

年貢は年代や地域、荘園毎に多様でした。平安時代から鎌倉時代の年貢は「土貢どこう」「乃貢のうぐ」「乃米のうまい」とよばれ、荘園領主は検注によって荘園内の土地と等級を確定し、田地では米、畑地では大豆や麦などの現物で貢納こうのうされた。

れました。麻績御厨には1193年(建久4年)8種類の年貢の記録が残っていました。それによると、

鮭さけ・百五十隻せき

鮭児さけこ・一桶

搗栗かうり・一斗

干菜米かんさいまい・一斗

であり、口入料くひりょう(係である神官への年貢)は

六丈布むさふ・六十段たん

四丈布しやふ・十六匹ひき

鮭さけ・三十隻

鮭児さけこ・一桶

とあります。鮭の数は隻とか尺で表していました。川の中に足場を組んで、木や竹の梁やなという仕掛けで獲とったようで、こうした場面は一遍上人絵伝や石山寺縁起などの絵巻にも描かれています。記録を見ると鮭を貢納こうのうしたのは信濃(長野)越後(新潟)越中(富山)

の3カ国だけです。伊勢神宮にとつてこれら3国は鮭を供給する貴重な地域であったことが分かります。(その当時、鮭が上ってくる一番南の川は、現在の東京都と神奈川県の間を流れる多摩川ですから、伊勢神宮のある三重県で鮭は獲とれませんでした。)

今日、鮭児さけこといえは1万匹に1匹いるかないかという貴重な若鮭のことですが、数量が「桶おけ」と書いてあるところを見ると、どうやら「イクラ」のことかと思われます。

また、搗栗かうりとは芝栗を乾燥させて火であぶった保存食で、後に武士が戦に出る際「かちぐり」の言葉の響ひびきが「勝ち栗」に通ずるところから、必ず食べたものです。

このように荘園からは米や野菜以外に、その地方ならではの特産品が多く領家に運ばれていました。

『用語の解説』

※ 御厨みくりやⅡ神社領の荘園のこと。

※ 皇大神宮Ⅱ現在の三重県伊勢にある「伊勢神宮」の内宮のこと。

※ 検注^{けんしゅう}＝領家の役人が荘園の広さを測った

り、作物の取れ高を調べること。

※ 貢納^{こうのう}＝税を納めること。当時はお金ではなく農産物や漁獲物、それに木材や紙などのモノであった。

なんだったの？ 荘園以外の土地

荘園は近畿地方を中心に、北陸、中国、四国、九州に及びましたが、後に開拓地である関東地方、東北地方にまで広まります。荘園は通常「^{まき}庄」と呼ばれますが、神社領は「御厨^{みくりや}」、牧場は「牧^{まき}」とよばれています。しかし、ここで注意しなくてはならないのは、日本中の農地が全て荘園になったのではないということです。

国府の支配下にある領地を「国衙領^{こくがりょう}」といいますが、この数もまだまだ多かったのです。また、国府の直轄地^{ちよつかつち}を「保^ほ」とよび、国府を経営する上で経済的な基盤になる土地もありました。

多くの豪族たちは生き残りをかけて、一部

は中央の有力者に寄進し、一部は国衙領にするという安全策をとっています。名前の下に「^{すけ}介^{じょう}、^{さかん}尉^{さかん}、^{さかん}目^{さかん}」という職名がついているのはそうした人々で、在庁官人^{ざいちょうくわんにん}とよばれている人々です。朝廷は国司を中央から派遣はしましたが、在地の豪族の力を利用して徴税^{ちようぜい}や土木工事を行っていました。

「用語の解説」

※ 徴税^{ちようぜい}＝税を集めること。

※ 在庁官人^{ざいちょうくわんにん}＝役人となった地方豪族のこと。



甲冑姿の若武者

(中西立太画)

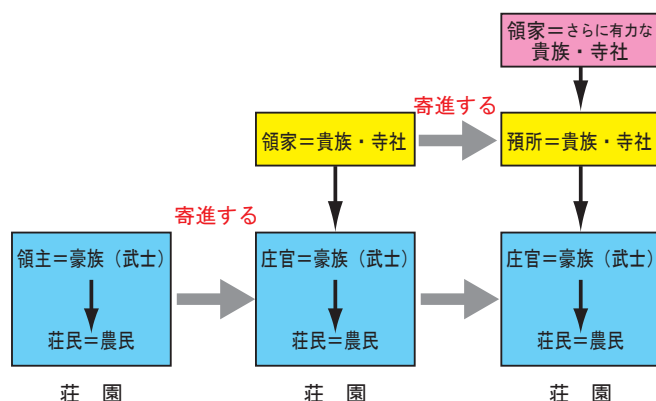
3. 武士がつくった鎌倉幕府 (1180～1190 年頃)

鎌倉幕府は頼朝がつくったというより、頼朝に味方した関東の武士がつくったといった方が正しいでしょう。関東地方は開拓地としては新しく、利根川・荒川・多摩川・相模川・酒匂川といった川すじの低地に水路を掘り、水田や畑が拓かれていました。農地には広さの差はありましたが、有力な農民が地方の豪族としてそれぞれの地域をまとめていきました。

しかしその前の平安時代は中期から後期にかけては国司や目代が勝手に税をとったり、領地を奪ったりということが当たり前のようになつていたため、豪族たちは自らを守るために武装したり、一族で互いに助け合ったりしました。

武士団とは互いに協力しあいながら、自分たちの領地を守ろうとする助け合いの組織のことです。更に彼らは結びつきの上に、名に重みをつけるため平氏や源氏と親戚関係を結びました。

それほどの努力をしてもなお立場の弱かった武士は、2章でも述べたように自らの領地

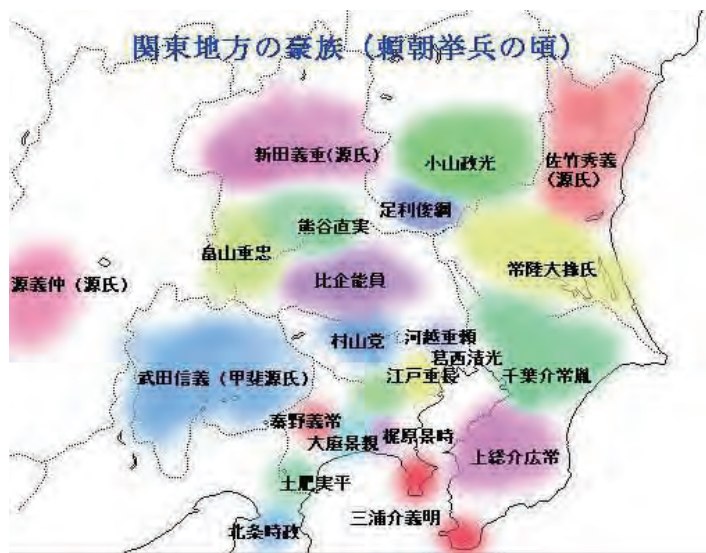


武士が寄進した荘園のモデル図

を中央の有力な貴族や神社、お寺に寄進しました。寄進とはいっても形の上のことで、都にいる権力者や有力な神社を領主にして、自分はその家来という形をつくりました。しかし、せっかく寄進したにもかかわらず、領主の力が弱まると、とたんに周りから侵略されたり役人に乱暴されたりしました。そこで彼らは現在の領主の上にさらに有力な貴族や神社を領主にしたのみしました。こうして一つの荘園に領主が何人もいるような形ができたのです。

関東地方だけがこうなったわけではありませんが、このように武士は涙ぐましい努力をして自分たちの領地を守ったのです。頼朝と戦った大庭景親も頼朝を救った土肥実平もこうした荘園を持つ武士たちでした。

石橋山で破れた頼朝は命からがら箱根に逃げ、それから海を渡って現在の千葉県安房地方に入りました。三浦半島から館山に逃げてきた三浦氏一行といっしょになるためです。その後、かねてより連絡を取り合っていた千葉氏と、千葉一族の大豪族上総氏が頼朝の味

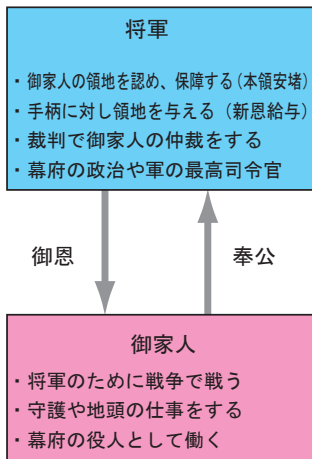


関東地方の武士団。（源氏）と書いてある以外はほとんどが平氏の流れを組む豪族たちです。

方になりました。上総氏の軍勢は2万人を超えていましたから、頼朝軍はいつきに大勢力になりました。

これを知った関東地方の多くの武士が頼朝の味方になりましたが、中には石橋山の合戦で頼朝の敵だった武士団も多く含まれていました。

頼朝はこのとき味方になった武士と主従関係を結び、それらの武士が持つている領地を認め、さらに敵から奪った領地を恩賞として分け与えました。このことを「本領安堵」「新恩給与」といいます。以後、頼朝と主従関係を持った武士を「御家人」と



よび、御家人と将軍は「御恩と奉公」の関係で結ばれることになりました。

御家人になれば、名目上の領主などを恐れることもないし、目代の横暴からも身を守ることができま。また、領地争いも話し合いによって解決すること、武士にとっては「とてもありがたい話」でした。

頼朝はこうして武士の心を掴み、平家を破り、関東に武士の政治組織を作りました。頼朝が作った仕組みは武士の生活を良くするためのものです。頼朝が自分の利益のことだけを考えていたならば、多くの武士が心から協力するということはなかったでしょう。

歴史から学ぶということは、年号や人の名前を覚えることだけではありません。こうした事実を知って「その時」人がどんなことを考え、どう行動したか。そうした人々の生き様を知って自分の生き方や行動の参考にしていくということが大切なのです。頼朝をはじめ多くの武士たちの考えや行動は、今の世の中でも十分に通用することです。

『用語の解説』

※ 国司Ⅱ現在の知事にあたる。ただし選挙で選ばれるのではなく朝廷が貴族に命じる。

※ 本領安堵Ⅱ御家人が元々持っている領地を、その人(一族)のものであることを将軍が認め、保障すること。

※ 新恩給与Ⅱ将軍が御家人に領地を新しく分け与えること。多くの場合敵から奪った領地だった。

名前が書いてあった矢の話

治承4年11月26日(1180年)年老いた女性が頼朝の元にやってきました。このままだと息子の瀧口三郎経俊が処刑されると聞いたからです。老母は瀧口家が代々源氏に仕え忠義をつくしてきたこと、特に平治の乱では源義朝のために京都で討ち死にした者までいたこと、経俊が石橋山合戦で大庭方(平家軍)についたのは成り行きであったこと、しかも大庭方についた者のほとんどが戦後に許され

たことなどを訴え、泣きながら息子の命乞い（いのちごい）をしました。

頼朝は老母の話を静かに聞いていました。が、やがて土肥実平に申しつけて一つの唐櫃（からび）を持ってこさせました。中には鎧（よろい）が入っています。しかしその袖（そで）には一本の矢が刺さっていました・「これは石橋山合戦で経俊の矢を受けた私の鎧（よろい）である」と頼朝は静かに話しました。そして、「瀧口二郎藤原経俊」とわざわざかに書かれていた矢を切りとって老母の前に置きました。息子の経俊（つねとし）が石橋山で頼朝の命を狙（ねら）った確かな証拠がそこにあつたのです。老母は無言で泣きくずれました。そして寂し（さび）そうに首をうな垂れて帰っていったのです。老母の涙に心を動かされた頼朝はその後、経俊の処刑を免じました。

吾妻鏡には生き生きとした描写でこの場面を書きしるしてありますが、いくつか興味のある事柄を読み取ることができます。

その第一はなんといっても矢に名前が書いてあったことです。武士の訓練は「弓馬の道（きゅうばのみち）」といわれているとおり、当時の

主力武器は「弓」でした。敵将の首をとることとは大きな戦功であり、相手の位とその時の状況に応じて恩賞の大きさも変わりました。頼朝の身体に矢が刺さりダメージを与えれば、かりに他の武士が頼朝の首をとったとしても、第一矢を放った経俊には当然のことながら恩賞が与えられたことでしょう。この場合の恩賞とは新たな領地のことです。そうした時の証拠になるように武士は自分の矢に名前を書いて戦に臨（のぞ）んだのです。

第二は石橋山の合戦で頼朝に敵対した武士の多くがその後許され、ほとんどが領地を安堵（あんど）されたということです。もともと、頼朝の旗揚（はたあぎ）は伊豆や相模を中心とした武士が、自分たちの利益を守るための戦いでもありました。東国の武士が頼朝を中心としてまとまるためには強い結束が必要であり、親戚（しんせき）関係で強く結ばれている武士団を簡単に断ち切ることはできません。武士はどちらが勝ってもよいように親子兄弟・親戚（しんせき）で分かれてそれぞれ敵味方に分かれました。そして、どちらが勝つ

ても家族の命乞い（いのちごい）を行いました。頼朝追討軍（よりともついぢうぐん）の司令官だった大庭景親（おほばかげちか）ですら兄の景能（かげよし）は頼朝側として戦っています。さすがに景親は処刑されましたが、景親とともに戦ったもう一人の弟・保野五郎景久（またのごろうかげひさ）は景能の命乞い（いのちごい）により助かっています。そして大庭の領地はその後も安堵（あんど）されました。ちゃっかりしているといえ、それまでですが、鎌倉時代を通してこのようなことはごく普通にあつたことです。

鎌倉時代の武士は江戸時代の武士とは大きく異なっていて、主君に対する強い忠誠心（ちゅうせいしん）というものはあまりありません。よくいえば合理的、悪く言えば損得勘定（そんとくかんじょう）で動いていたということになります。敵味方に分かれて戦うということは、保険を掛けておくようなもので、彼らにとって最も大切なことは忠節（ちゅうせつ）をつくすことではなく、一族の繁栄（はんえい）とそれを支えた領地（りやうち）を守ることにつきますのです。一所懸命（いっしょけんめい）の地を守り抜くためには手段を選ばない。これこそが一族を支えるもつとも武士らしい姿といえます。

『用語の解説』

※ 安堵^{あんど} 領地と地位が認められること。これが武士にとって一番大切なことでした。

※ 忠誠心^{ちゅうせいしん} 無条件に主人に従う心。

※ 東国^{とうごく} この時代では中部地方・関東地方のこと。

※ 命乞^{いのちご} いゝ命を助けることを願うこと。難しい言葉で助命嘆願^{じきよめいたんがん}という。

北条政子強いわけ

政子の生まれた時代は平安時代の終わり頃で、豪族（武士）たちは自分の領地を守るために武装したり、京都の有力者のもとに通つて警護^{けいご}をしたりと大変な時代でした。

政子はそうした武士の家に生まれた娘です。当時は、親が死んだあとの遺産相続など、男と女の権利はほぼ同等で、女性の中には甲冑^{かっちゅう}を着て戦に出る人もいました。

鎌倉時代の有名な法律「御成敗式目^{ごせいはいしきもく}」には男女が財産について同じような権利を持っていることが書かれています。また、平安



蛭ヶ小島に立つ若い頃の頼朝と政子の像。二人が支えながら新しい時代を切り開いていきました。

時代の終わり頃から関東では現在のような「嫁入婚^{よめいりこん}」になり、嫁いだ女性が一家の切り盛りを行うようになりました。それまでは婿入婚^{むこいりこん}といって、男性が女性の家で生活するという形でした。「この世は俺のものだ」と詠^{うた}った、あの藤原道長^{ふじわらのみちなが}でさえも、実は奥さんの家で生活していたということになります。

す。

政子は今と同じように頼朝のところに嫁ぎましたが、嫁にきたといつても控えめで我慢強いお嫁さんのイメージではありません。「私がいなければこの家は成り立たないのよ」と責任をもつて入ってきた人です。政子の場合には性格的にも、それが大変に強く「私が頼朝を支えなければ」という意識が強かったようです。

頼朝の死後も政子は弟の北条義時との連係で、幕府を新しい形に導いていきました。頼朝以後150年間も鎌倉幕府は続きましたが政子の存在がなかったらこの幕府はもつと別の形になっていたことでしょう。

『用語の解説』

※ 甲冑^{かっちゅう} 「よろい」「かぶと」のこと。

※ 御成敗式目^{ごせいはいしきもく} 武士政権のための法律。第三代執権^{しつけん}の北条泰時^{はつじょうのやすとき}によって作られた。

※ 執権^{しつけん} 将軍の補佐役で政務を取り仕切った最高職。代々北条氏が役についた。